

〈書評〉

松本朗・岩田美喜・木下誠・秦邦生 編
『イギリス文学と映画』
(三修社、2019年)

政 森 志津子

本書は、イギリス文学と映画とのさまざまな関係について狭義のアダプテーション研究の立場からアプローチし、原テキストと映像版との詳細な比較研究を「文学から映画へ」という方向性で行うものである。おもにルネサンス期から現代までのイギリス文学のなかからこれまでに映画化された代表的作品に関する論考を年代順に並べ、原テキストと映像版との詳細な比較研究を行う第1部全16章と、一定のテーマやジャンルの観点から複数の作品を論じることによって第1部を補完する第2部全3章、ならびに全12のコラムから構成されている。

序章において、秦邦生はアダプテーション研究のこれまでの変遷について言及している。かつては原作としての文学テキストの絶対的価値を自明視し、原作への「忠実さ」が重視されていたが、「原作の優位性」を退け、「あらゆるテキストはつながっている」という「インターテキスト性」に主眼を置くアプローチへと転じていった。しかし、最近ではインターテキスト性の過度の強調がアダプテーションの輪郭を曖昧にするのではないかという懸念が高まり、「忠実さ」という観点が再評価されているとのことである。

第1部第12章において、岩田美喜はジョージ・バーナード・ショーの戯曲『ピグマリオン』からブロードウェイ・ミュージカル版と二本の映画にいたるイラ

イザというヒロイン像の変遷について分析している。そして、技術の進歩や時代の嗜好に従ってイライザが「語る主体」から「見られる客体」へと時代を逆行するかなのような変化を見せていることを指摘する。一方、彼女が「(労働者階級の) 女性は自分の声で語れるのか」という、原作が探求した女性の自立という問題を、時代を超えて提起し続けていることが、一連の改変のなかで最も驚くべき点だと結論づけている。

第1部第14章では、小山太一がグレアム・グリーンの小説『権力と栄光』と、『逃亡者』と題して映画化されたジョン・フォード監督の作品を題材とし、いっけん原作を裏切るようであるその精神に共鳴する、文学と映画の「擦れ違いの力学」について分析を試みている。小山は、原作と映画の関係について、原作の核となる逆説的な宗教性をフォードが排除し、飲んだくれの背徳者だった神父を道徳的な殉教者に美化したことにより、両者のあいだに大きな「違い」の力が生じたことに着目する。一方、フォードがメキシコにおける反カトリックの歴史を踏まえた物語を「聖書で最初に語られた古い物語」へと抽象化したこと、そしてグリーンがメキシコの歴史へのコミットメントを回避し劇空間を抽象化したことは、「違う」どころか並走に近い「擦れ」(原作者の意図と映画の作り手の意図が接近／並走する局面)であると指摘するなど、あからさまな「違い」のなかに、意外な「擦れ」が見られることを論証している。

このほか第1部には、栗山智成によるウィリアム・シェイクスピアの『ハムレット』とローレンス・オリヴィエ監督の映画、武田将明によるダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』とルイス・ブニュエル監督の映画、吉田直希によるヘンリー・フィールディング『トム・ジョウズ』とトニー・リチャードソン監督の映画、高桑晴子によるジェイン・オースティン『高慢と偏見』とBBCドラマ・シリーズ、木下誠によるシャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』とキャリー・フクナガ監督の映画、川崎明子によるエミリー・ブロンテ『嵐が丘』とウィリアム・ワイラー監督の映画、猪熊恵子によるチャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』とデイビッド・リーン監督の映画、大久保譲によるアーサー・コナン・ドイルのシャーロック・ホームズ・シリーズとBBCドラマ・シリーズ『SHARLOCK』、松本朗によるトマス・ハーディ『ダーバヴィル家のテス』とロマン・ポランスキー監督の映画、田中裕介によるオスカー・ワイルド『ウィンダミア卿夫人の扇』とエルンスト・ルビッチ監督の映画、中井亜佐子によるジョウゼフ・コンラッド『闇の奥』とフランシス・フォード・コッポラ監督による映画、中山徹によるジェイムズ・ジョイスの『死者たち』とジョン・

ヒューストン監督の映画、秦によるJ・G・バラード『太陽の帝国』とスティーブン・スピルバーグ監督の映画、板倉巖一郎によるイアン・マキューアン『贖罪』とジョー・ライト監督の映画に関する論考が収録される。どれも各執筆者それぞれのテーマに沿った比較分析となっている。

第2部の全3章は、テーマやジャンルから複数の作品を論じることになる。岩田による第1章では、「センセーショナルに視覚に訴える」初期の映画が、いかに小説ではなく19世紀演劇（とくにメロドラマ）の伝統と慣習から影響を受けたのかを明らかにしている。そして、演劇と映画がもっていた原初的な関係を確認することにより、映画と演劇の本質的な差異の存在を明示している。

秦による第2章は、SFの「イギリス的伝統」の代表的作家であるH・G・ウェルズからアーサー・C・クラーク、現代のカズオ・イシグロの小説にいたる3つのSF作品とその映像版を具体例としてあげ、SF的想像力の潜在力を拡張してきた過程を提示する。小川公代による第3章は、ゴシック小説特有の「怪物」表象に着目しながら、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』とブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』を題材とした多くのゴシック映画作品を紹介し、前者では怪物自身の「主体性」を、後者では吸血鬼の「他者性」について考察する。

以上に加えて、各所に配されたコラムにおいて、多彩なテーマや作家作品が紹介されている。コラム1で岩田は20世紀末以降に生まれたシェイクスピア映画の傾向を、原作の物語を敢えて観客に身近な現代世界に落とし込み、異化効果を強調していると総括する。例として、台詞はシェイクスピアの原文そのままだが、時代設定を現代に、舞台をブラジルの架空都市に変えたバズ・ラーマン監督の『ロミオ+ジュリエット』、同様に、台詞は原文を用いながら現代のマンハッタンを舞台とし、デンマーク・コーポレーションという大企業の会長職をめぐる争いに設定を変更したマイケル・アルメレイダ監督の『ハムレット』などをあげ、このような近代映画の試みは、誤読ではなくシェイクスピアの精神の忠実な継承だと評している。

また、コラム11で唐澤一友は、中世英文学を題材にした映画に見られる「中世性」について論じている。著者や著作権といった概念が希薄だった中世では、文学作品の多くが既存の作品の改作であった。つまり作品とは、改作で形を変えていくものだったため、現代において中世文学作品を映画化する際に、今の視点から大胆な脚色が加えられる現象は、中世以来の文学継承の伝統の上にある現象だと考察する。

コラムにおいてはそのほかに、スコットランド文学（松井優子）、詩・詩人と映画（岩田）、テレビドラマ（高桑晴子）、D・H・ロレンス（武藤浩史）、ヘリテージ映画（松本朗）、LGBT（長島佐恵子）、移民（板倉巖一郎）、南アフリカ英語文学（溝口昭子）、現代劇作家と映画脚本（岩田）、中世英文学とファンタジー（唐澤）など、論文において取り上げられなかった作家やさまざまな興味深いテーマが紹介されている。

本書における執筆者たちは「文学から映画へ」という方向性に主軸を置きながら多様な事例を論じ、「映画と原作との比較が両者に光を投げかける」よう意欲的に各テーマに取り組み、論じている。本書がアダプテーション研究にさらなる発展をもたらすことは間違いない。ぜひ本書を手にとっていただき、原作と映画版それぞれに隠された、より奥深い意味に触れていただければと思う。